

(外資系製薬企業勤務 40代 勤務医より転職 として記載いただく予定です。)

製薬企業での医師の勤め方にはさまざまな形態があると思いますが、社員の健康管理を行う社医とは異なり診療業務からは全く離れて企業に勤める場合について、勤務医から転職した経験から紹介したいと思います。一般に製薬企業内で医師が採用される部門としては、新薬開発に関わる臨床開発部門、副作用関連の業務を行う安全性部門、マーケティング部門などがあります。国内企業と比較すると概して外資系企業に就職する医師数は多く、海外本社においても重要なポストに多くの医師が就いています。

まず臨床開発部門では、主に治験計画から実施に関する業務に医学的な側面より携わり、専門医からの意見収集や、試験結果の評価等を行います。開発チームの一員として働く場合もあれば、開発チームの長として治験全体の管理を任される場合もあります。安全性の部門では、治験薬や市販品についての安全面の評価と対策が主な業務であり、行政当局への報告書の医学的なレビューなどのデスクワークが多くなります。有害事象としては様々な病状が報告される上に、担当する製剤も専門領域に限定されない場合が多いため、医学的な見解を求められて対応すべき疾患領域はかなり広範囲になります。またこれら開発や安全性の部門以外には、顧客への情報提供など、営業面での活動に医師を配置する企業もあります。

企業で働く医師の経歴は臨床経験の有無を含め様々ですが、どのような部門で働く場合でも多少の臨床経験と専門分野はあったほうがよいと思います。とは言え、臨床医として得た専門知識がそのまま役立つ場面が多いとは言えないように思います。企業が独自には得難い実地的な知識も貴重ではありますが、基礎医学を含めた幅広い医学知識を更新しつつ、さらに薬学や薬事法などに関する知識を新たに吸収していくことが必要です。

また、医学知識と同等に、英語の読み書き、会話も含めた実践的な語学力についての要求度は高く、特に外資系企業では海外本社との討議をはじめ海外とのやりとりが多いため英語力は不可欠です。この他、国内企業、外資系企業の別なく、行政当局への提出書類などの文書作成に関わる機会も頻繁にあるので、文系的な作業が好きな人には仕事がしやすいと思います。

勤務医に比べれば、メリットとして勤務時間やコスト面での待遇の良さを挙げることはできますが、一方で、企業によってはアドバイザー的な位置づけから受身的な働き方になる危うさもあると思います。ですから企業での仕事に興味があって転職を考慮する際には、各企業の特色や現状の雇用条件を検討するだけでなく、将来的にその企業での働き方を能動的に開拓していけるかどうか、自己に対しても企業に対しても問うことが大切だと思います。社員としての医師を先生とは呼ばない企業が多いですし、評価側は医師ではないことが多いため必ずしも医学的知識の高さが評価されるとは限りません。また良い薬を開発することができれば医療の発展に大きく貢献することができますが、臨床で直接患者の治療を行うことに比べると企業の成果は間接的であり、仕事の達成感や満足度は臨床医の得るものとは異なるかもしれません。また、医師以外の社員も含めて、製薬企業ではステッ

プアップの機会を捉えてより好条件で能力の生かせる業務を見つける人も多いため、医師についてもより好条件で他企業へ転職するケースも珍しくなく、その働き方には流動的にみえる面もありますし、まだ医師のキャリアの一つとして企業への就職そのものが世間に十分認識されているとは言い難い面もあります。しかし、既存の医師の業務にとどまらず、企業内にはその能力を生かせる分野が種々拡張されてきており、国内では少数派だった企業内の医師数は近年増加しています。能動的に働く人にとっては高い満足度の得られる職場であり、製薬企業における医師の役割が発展途上であるという点からみると、国内外を問わず企業内で医師が働く場は今後ますます広がるのではと思います。